

アルザス史 1 地質時代から人間の歴史へ

志村 良知

フランス東北部、「アルザス」の歴史について『フランスとドイツの間を行ったり来たりした、とはどういうことだったのか』に着目して書いてみたい。もちろん、行ったり来たりしただけではなく、フランス時代、ドイツ時代はそれぞれ、一番長くて600年間、最短で5年間続き、そこには人々の生活と文化があったわけであるが、そこはあえてとばし、行ったり来たりの局面だけに着目したい。それでもそれなりに長くなるので以下の12章に分けて連載することとしたい。最初に基本として認識しておいて頂きたいのは、アルザスは二つの強国に挟まれた狭いながらも極めて豊かな地域で、行ったり来たりの本質はカエサルからの侵入から第二次大戦まで「豊かなるアルザスの奪取」であったということである。

1. 地質時代から人間の歴史へ
2. ゲルマン民族の大移動から神聖ローマ帝国
3. 三十年戦争。初めてフランスへ
4. プロシヤの勃興と普仏戦争。最後の授業
5. プロシヤによるドイツ化
6. 第一次世界大戦によるフランス化
7. 第二次世界大戦勃発。大エクソダス
8. 第二次大戦下のドイツ化
9. 米仏連合軍のアルザス解放戦闘
10. コルマルの解放
11. 第二次大戦終結とフランス化
12. 現代のアルザス

1 地質時代から人間の歴史へ

今から6億年前、現在のベルギー東部、ドイツ西部、フランス北部にあたる広い地域が隆起して大きな山岳地帯を作った。現在アルザスと呼ばれているあたりは、東西100キロ、

南北200キロ余りの山脈を形成、北に向かうミューズ川、東に向かうドナウ川などの水源になっていた。

地球の歴史ではつい最近の6千万年ほど前、アフリカ・プレートが北に動き、イタリア半島が大陸に衝突しアルプス造山運動が起こった。大陸中央部の山地はその反動で陥没し、アルザスの位置にあった山脈も東西の裾の部分を残して陥没してしまった。この陥没部分に新しくできた巨大な山地、現在のアルプス山脈を水源とするライン川が土砂を運んできて堆積、西にボージュ、東にシュバルツバルトという南北に長い山脈を配した東西40キロ、南北100キロ余りのアルザス平原を形成した。

後にアルザスと呼ばれる地域に初めて人が住んだのは、紀元前1200年ごろ、ケルト族に属するいくつかの民族と考えられ、北アルザスには彼らの宗教的遺跡が残っている。

アルザスが最初に人間の歴史に登場するのは紀元前58年のカエサル遠征を記録した『ガリア戦記』である。カエサル軍は、アルプスをどこかで（おそらく現在のモン・スニ峠）で越えて、ローヌ川の谷に出、ブザンソンからボージュ山地の南の縁、ジュラ山地との間の地峡を東に向かい、ミュールーズ付近からアルザスに侵入した。これはベルフォール地峡と呼ばれる現在においてもフランス南部からアルザスに入るメインルートである。

カエサルは、ここから先住民、ローマの定義によればガリア蕃族を攻め従わせながらライン左岸を北上して行く。全て攻め滅ぼして更地にしたのではなく、従う者の土地は植民地とし、ローマのシンボルであるパンの為に小麦とワイン用のブドウ栽培と文化を伝えた。従って、アルザスでもローマの遺跡は珍しくなく、ライン川畔では本家のローマでも貴重だというローマ時代の色ガラス器が出土する。また、アルザスワインに関しては、ローマのブドウ栽培／ワイン醸造技術に加えてアルザス独自にもギリシャや南仏からワイン生産技術を導入していたという。ワインはこれから後もずっとアルザスを支える重要な産業になっていく。

1980年代初め、後に私が働くことになるアルザス工場建設でもローマの遺跡にぶち当たり、調査の為に工期が遅れに遅れて、投資責任のあった我々事業企画グループは遠い日本で大いにやきもきさせられた。結局この遺跡の大部分は調査後埋め戻されたが一部は上部をガラス張りにしてその上に建屋が建てられた。今でも床の一部がガラス張りにしてあり、ガラス床越しに発掘当時の遺跡を見ることができる。

2.ゲルマン民族の大移動から神聖ローマ帝国。に続く